
The Last Ring

暁 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Last Ring

【Zコード】

Z2119F

【作者名】

暁 瑰珀

【あらすじ】

『瑰珀』・・・彼女は自分の國のため、世界のために、自らの命を犠牲にしました。彼女を守り、彼女の力となつたのは、一つの指輪。『リング』と呼ばれるこの指輪は、強大な力を秘めた石をはめ込み、自ら光を発すという、不思議な指輪でした。・・・瑰珀が消えてから数日。平和な日常が戻ってきたころに、その少女は姿を現しました・・・。

第一章 記憶を失くした少女

一

第一章 記憶を失くした少女

『 ここは、どこ? 』

気が付けば、私は見知らぬ町に一人、ぽつんと居座っていた。

・・・冬なのかな? 小さな白い妖精が、灰色の空をふわふわと舞つていた。

身体に吹き付ける風が、ハンパじゃないほど冷たい。

あたりも真つ暗で、人の気配もなし。

・・・真夜中なのかな?

普通に眠り込んでしまったら、そのまま一生田がさめなくなりそうな・・・。

でも、体は暖かかった。

・・・服は、とにかく軽い。

白くて長いカーディガンに、薄く銀がかかつたワンピ。

それと、革靴を履いていた。

が、この服装、なんだか鬱陶しい。

「 ・・・ん? 」

首に指輪がぶら下がっていた。

純白のリボンに巻きついていて、首にピッタリとフィットしている。で、指輪自体は、あまり高価そうでなくて・・・。

どこにでもありそうな普通の銀わっかに、小さな透明の石が、はめ

込まれて いるだけだつた。

・・・ 売つても、そんなにお金になりそつこない・・・。
むしろ、リボンのほうが、数倍高そう・・・。
それぐらい、普通の指輪だつた。
ただ・・・・・・。

「おもひつー！」

・・・ ただ、重たい」とを除いては。

雲の間からわずかにでている円の光が、指輪を鈍く光らせる。
石は、光を反射せず、ただ透き通つていた。
そして、ほんの少しの白光が、私をじつと、睨みつけていた。
まるで、生きてこるかのようだ・・・。

「・・・ 不気味すぎる。」

本当に不気味。。

鳥肌が立つ。

指輪が怖いわけじや、無いけれど、氣味が悪かつた。
怖くないよ・・・・・・うん・・・・。

『重いだけじや、何にもならないし・・・。
・・・ 捨てよつかな・・・。』

そう思つて、街中を通る川を見つけ、そこに歩み寄る。
そして、リボンを解く為に、首の後ろへ手を回す。

「…………。あれ？」

蝶結びのはずのリボンは、ボンドでくつ付いてるよつて、全く解けなかつた。

・・・。ますます不気味だ・・・。

今度は、頭から抜いてみよつと思つた。

結果は『×

黒くて長い髪が、邪魔をする。

・・・。

・・・呪いか？これは。

その後、色々な方法で外そうとした。

が、結果は惨敗。

全く歯が立たなかつた。

小さな妖精が、冷たい空氣を分けて落ちてくる。

記憶がはつきりしない・・・。

雪の降るこの景色が、霞んで見えた。

引っ付いているリボンを必死に外そうと、頭に血が上ってきた頃だつた。

「ねーねー？ その指輪、いるないんなら俺にくれない？」

「…は？」

後ろに、見知らぬ男がいた。

第一印象、バツ ×。

年のわりにはしつかりした金髪のロン毛。

だらしなく着崩された服装。

穴だらけのセンス悪い靴。

数えられないくらいの変てこな飾り。

・・・どーみても、不良にしか見えない。だらしなさすぎ・・・。

「嫌だといつたら・・・？」

その不良を見上げて、睨みつける。

いくら、こりない、捨てたかった指輪でも、こんな奴にだけは渡しあくない。

はつきり言つて、ウザい。

「はあ？ まだ小さいせえ餓鬼が。俺様、この辺りでは結構有名だぞ？」

それを知つての口か、それは。

そんなことこわれても、ここがどうされても知らないんですけど。

むしろ、自分のことも、全くわかんないのに・・・。
てゆうが、本当にこの人、馬鹿・・・？

「知りません。ほつといでください!」

それに・・・・・黒鹿を相手にしたくありません

なるべく丁寧に。

たけど 本心も少し入った
まあ、当二の前か。

三一書院小説文庫

そして、向こうの反応も変わった。

こんなお子様は馬鹿呼ばわれられたんたるもの
ても可笑しくない。

「黙つて聞いてりやあ・・・・餓鬼のくせに生意氣な口、叩きやがつて・・・。

わざわざその指輪を、渡せりて語りてんだよ!」

言うが早いが、不良は小型ナイフを懐から取り出し、両手で構え、私に向かつて真っ直ぐ突進してきた。

卷之三

危機一髮。

顔ギリギリで避けたから、頬を少しきられてしまつたケド……。

避けた後、少しよろけてしまった私は、その場にしゃがみこんでし

まつた。

何だか、とてもなく体が重たかった。
それをみて、男は即座に向きを変更。
また、突進してきた。

鉄の刃が、私に向かつて飛んできた。

（避けられない・・・・・！）

・・・ん？・・・あ、あれ？

痛く・・・ない・・・？

そつと、目を開く。

「がつっ！？」

不良が数歩、後に退く。

私の辺り、数メートルは、半円の壁が出来ていた。オレンジ色で、透けている。

ポオオオン、ポオオオン

不思議な音を立てて、私を囮つていた。

向こうの不良も驚いただろうケド・・・。

正直、私にも何が何だか・・・。
と、不良が声を上げた。

「指輪だ・・・。指輪の力だ・・・！神の力だ！
やつと・・・やつと、見つけ出した！

・・・ おい餓鬼。その結界を解いてその指輪を、お、俺にくれ・。
悪いことないわねえ・・・。その傷も、ちやんと誤る。この通り
だ・・・！

不良は、その場に膝を着くと、土下座をした。
さつきまでのあの態度が、いつぺんに消えてしまつぽじだった。

・・・ ただ、結界だかの解き方、わかんないんだけど・・・。
それに、立てないし・・・。

「ど、どひつて解くのぞ。」

とつあえず、聞いてみる。

不良は、パツと顔を上げて、私に真つ直ぐ目をやつた。

「そんなの、俺様にわかるわけ・・・・。」

「俺なら、知つてゐるぜ？」

別の声がした。

不良の後ろから、人影が近づいてきた。

「よつ、琥珀^{コハク}」

・・・・。

見るからに私と同じ年齢の、漆黒の髪の男の子。

右目がルビーのような紅い瞳。左目がエメラルドのような緑色だつた。

・・・・し、知らない・・・。

と、琥珀・・・つて、・・・誰？

「おい、おまえ、結界の解き方わからんのか？
だったら、俺様の命令だ。とつととこの結界を解いて、あの餓鬼
の指輪を取つて来い。」

不良・・・。

やつぱり『あれ』は嘘か。全く。

少年は、不良の様子を見ると、鼻で笑つた。

「ボスは指輪の為だつたら、女の子にまで土下座をするようになつ
たんですね。」

正直、馬鹿みたいです。」

明らかに挑発だつた。

口元が笑つている。

「ほ、ボスう～？おめえの顔なんて、見たこともねえぞ？」

不良が腰にしまつたナイフに、手を伸ばす。

「新入りですから」

少年が、にっこりと笑つて返した瞬間。

不良は少年に切りかかつた。

その口は、不気味だつた。

少年と、不良の間はほんの少し。

避けられるわけが・・・・・。

「……あつぶないなあ。新入りに、手荒いお出迎えですね。ボス？」

「あつた。

少年は、不良の攻撃を意図も簡単にかわし、

その背後に回ったのだった。

「！？」

少年は、不良の腹に、一発拳を入れた。
ほんの、少しの時間だった。

不良が倒れると、少年は私の結界に近づいてきた。

「琥珀にしては、結界張るだけなんて、珍しいね。
いつもなら、電針ぐらい、当てるのに……。

「結界、解けば？」

「は？」

「なにいつてるんだ？」この少年。

琥珀つて、誰だ？

「ダメだ。

考えるほど、頭が痛くなる。

結界つて、体力も使うのかな……。

パチンッ……

・・・あ、

結界が、解けたみたい・・・。

少年が、近寄ってきたのが、なんとなく判った。

でも・・・私は、深い暗闇に落ちた気がした。

第一章 記憶を失くした少女 四

「…………はぐ…………」

…………瑚珀つ！

男の子の声で、目が覚める。

…………痛。

頭が、鉄球で殴られてるみたい…………。
側にいた少年が、口を開いた。

「あ、よかつた、気が付いた。

なあ、瑚珀。結界張つただけで倒れるつて、大丈夫？
…………てゆうか、どうやつて、城、抜け出したの？」

…………瑚珀つ…………。

誰なのや。

そして、何故城？

「えと…………瑚珀つて、誰のこと？」

体を起しながら、頭を抑えて聞いた。

少年は、目を丸くした。

まるで、びっくりした時の魚みたいだった。

「・・・え？・・・琥珀・・・だよね・・・？」

し、知らない・・・。

第一、自分のことさえ、何一つ、覚えていないのに・・・。
すると、単なる人違い・・・？

失礼な男子も増えたもんだ。

「だから・・・琥珀つて、いつたい誰のこと？」

気まずい空気が、暗闇をすり抜ける。

その空気を打ち負かすように、少年はいきなり吹き出した。

「琥珀つたら、相変わらず冗談が下手だねつ！
とぼける前に、その指輪、外しどきなよつー！」

と、笑い転げてる。

いつたい、何がそんなに可笑しいのか・・・。

といふか。指輪、外れないし。

はつきり言って、近所迷惑じゃないのかな。

夜中だらうじ。この気温じや。

「・・・。指輪。外せないんだけどな。

外せたら、こんな安そうな指輪、さつさと捨てていたよ？」

私の一言に、少年の笑い声が、ピタリと止まった。

「・・・琥珀が指輪（ロング）を捨てよつとした・・・？」

聞き取り難い程、小さな声だつた。

そして、その声は、怪物に襲われたかのようになつて、怯えていた。

「……俺の名前、判るか？」

少年は、私に詰め寄ると、そういつた。
判るわけ、ないじゃん。。

「……判らない。

私、自分の名前も判らないし、ここがどこかって事だつて、判
ないんだからつ。

後方へ飛びのいて、腕をブンと、振り上げる。
全然、怖くなんか無かつたのに、今になつて恐怖が押し込めていた。
泣きたくなつた。

なんで、今、こんなに怖いんだろう。

さつきまで、つい数秒前まで、全く氣にならなかつたのに。。。

「お前、どこから來た?どこに居た?」

少年は、質問を続ける。

今度は、近寄つてこなかつたが、真剣な声だつた。

「……」

何も答えなかつた。

「……答えられなかつた。

今の私と少年を、たとえるなら、「蛇に睨まれた蛙」。

その場から、一歩も動けなかつた。

逃げ出そうと思えば、逃げられるのに。。。

でも・・・初対面の異性に、自分のことを言つような、いい子ぢやんでもない。

「知るかよ。チビ。」

私は、元々、口が悪かつたのだろうか・・・。
助けてもらつた恩はともかく、他人だ。少なくとも。
それに、チビって、言ってやれば、向こうも怒つて帰ると思つて
たのに、この少年は、

「アハハハハハッ！！やつぱり琥珀だつ！！」

・・・なんていつて、また笑い転げた。
な、何で・・・？

少年は、腹を抱えながら、続けた。

「だつて、俺のこと、チビって呼べたの、この世でたつた一人だけ
だもんつ！」

「・・・で？」

正直、もう、飽きてきた。

「で、そいつが琥珀、お前だ！！」

ふーん。琥珀ねえ。

でも・・・。それ、人違ひだよ。きっと。

「あーでも待てよ？」

少年は、また真顔に戻った。

「なあ、琥珀。その指輪、^{リング}何の為にあるか、知つてるか?」

知らない。

というか、勝手に琥珀って呼びつけないでよ。

「・・・まさか、知らねえのか、本当に。」

黒い癖つ毛を、かき上げる。

モモ遺二二た。

何も言えなくたつてしまつたじやない。

「あのね？言つてる意味が、全く判らないんだけど。
私は、琥珀なんかじゃないの。」

「じゃ、今前、なんて言つの?」

即答。

しかも、答えられない。

「ビートで生まれて、ビートで育ったのか、言えるか?」

• • • • • • •

・・・何も、言い返せない。

覚えていないんだから。

自分のことは、何一つ。

「ふーん。覚えてないんだ。」

何故判る。

「でもなあ。琥珀に妹いたなんて、聞いたこと無いしなあ・・・。」

知るか。

「とはいえ、お前、琥珀そつくりだ。瓜二つ。」

そーですか。

「あ、そつそつ、忘れてた。なあ、琥珀・・・。」

「琥珀じゃないっつ！！！」

キレた。当然です。

「何も言わずに聞いていたら、何!? 人のこと、勝手に『琥珀』なんて、呼びつけて! からかうのも、いい加減にしてくれない!?」

少年が、何もいえなくなっているのを見て、私は我に帰った。
・・・少年の目が、変わった。

寂しい、冷たい瞳^め

「そつか、そだよ・・・な。

琥珀なわけ、無いよな・・・。」

少年は、その場に座り込むと、一粒の透き通った涙を流した。

宝石のような、紅色と緑色も、
泥にまみれたように、光を失っていた。

「・・・・。」

なにも、いえなかつた。

泣き止むまで、待つしかなせそつだつた。

「・・・でね・・・琥珀は・・・。」

現在、私はこの少年、瑠衣ルイと一緒に、長すぎる一本道を歩いている。女の子みたいな名前つて、笑つたら、

「琥珀も初めてのとき、そうこうした」

だつてや。

瑠衣が泣き止んだ後、あの町を出て、隣の町まで歩いている。な、長い・・・。

でも、何だか、全然疲れないんだよね。
・・・何故だ・・・?

それで、この道はとにかく真っ直ぐ。

木がちょこちょことあるだけで、並の「い」の字も無い。土を掃つただけの簡単な道を囲むように、短い草が揺れるだけ。なんか、こうゆうのを野原つていうのか・・・?

て、いうのが感想。

暖かい陽だまりは、朝つて雪つことをはつきつと示し、太陽の光を浴びて、小さな花たちも嬉しそうに香りを飛ばす。その香りは、少し冷たい風に運ばれて、遠くの山まで、まるでタンポポの綿毛のよつて私の隣を通り過ぎていった。

陽が、首もとの指輪を目立たせる。

「・・・瑠衣。」

「何?」

ある重要なことに気が付いて、足を止める。
待っていたかのよう、「お腹が グルル・・・と、鳴った。」

「お腹空いた。」

「・・・もうちょっとだから・・・多分。」

おいおい・・・。
多分ってなんだよ。多分って。

・・なんか、嫌な気がした・・・様な。

「まつたく町なんて、見えないんだけど・・・。」

「山をもう一つ越したとこだから・・・。ねつ?」

ねつ? ジャねーよ。

山を一つ越すつて・・・。

指輪が、これまた重く感じるんですよ。
本当に手放したくなる・・・。

不幸は人生の付物おまけなのか・・・?

バイクの音がした。
一台だけじゃない。
何十もの音が重なつて聞こえた。

「オラオラオラオラツ！……！
生意氣な糞餓鬼共！見つけたぞオ！？
もう逃げ場はねエゾ！？」

・・・嫌な予感的中。

バイクの音が大きくなつたのに気が付いて、振り向いた時には、
周りは、バイクの群れと化していた。
そしてその先頭には、あの不良。
てゆうか、偉いって本当だつたんだ。
正直、信じてなかつた。

「あれ？ボス。またヤラれに来たんですか？
こんなに大勢の、先輩方と一緒に。」

瑠衣が挑発をした。

ホントに好きだな。コイツ……。

「ああ、？コイツ、新入りっすか？ボス。」

モヒカン頭が言つた。

「僕？僕は新入りですよ？ついさつき、ボス直々に挨拶しに言った

んだから。」

「おい。餓鬼。

新入りのくせに、ボスの名前を呼ぶとは、失礼だぞ・・・！」

と、瑠衣の後ろにいた、長髪が拳を振り上げた。

「・・・！あぶな・・・」

バ
キ
イ
ツ
。

私の心配は、ます意味が無かった。

瑞衣の後にはさつきの長髪男が伸びていった

「・・・いやさ、殺^ヤられる前にやつたんだけど・・・。蹴りだけで倒れるなんて・・・弱いね。この人。」

・・・怖つ。
ニッヒ笑つた顔は、殺意に満ち溢れていた。

・・・ ただし。琥珀に手エ出したら、
一 掛かつ できなよ? 全員遊んであけるから

・・・・・殺すから。先に言つとくよ。」

「……………つ――殺つちまえ――」

餓鬼だろうが、手加減は無用だ！！！！

真っ赤になつた不良がいつた。

とたんに、バイクごと押し掛かって来る。まず、瑠衣に襲い掛かつてきた。

て。え？

死んじゃうじゃん！！

バカ瑠衣！！

パンッ！

破裂音がした。

瞑つていた目を開けると、さつきと同じ、オレンジ色の結界が瑠衣を囲んでいた。

瑠衣は、手を突き出して、真剣な顔つきだった。
てことは・・・。

瑠衣の結界？

「ちイ。魔術師かよ・・・。

厄介だな・・・。」

不良の言葉に、瑠衣は笑った。
勝ち誇つた笑みだ。

「おい、ヤロー共、

魔術師は後回しだ。女のほうを殺れ！」

その一言で、瑠衣の結界は解けた。

瑠衣の周りにいた、バカそうな人たちは、私の周りへと移動を開始した。

私と瑠衣の幅は、だいたい数メートル。
逃げられる訳が無い。

でも、結界はどう出すのか知らないし・・・。

バイクに乗った一人が、短剣を取り出し、私に投げつける。

座り込んでしまった私の前に、紅いローブが舞つた。

「・・・なあ。

瑚珀には、手を出すな・・・つて、言つたよな。俺。手を出したら・・・・・・

瑠衣は、空を切つてきた剣を、素手でつかむと、不良たちを睨んだ。

「殺すつてことも、言つたはずだよな・・・?」

第一章 記憶を失くした少女 五（後書き）

次回。瑠衣がキレます。注意してください。

第一章 記憶を失くした少女 六

「殺すつてことも、言つたはずだよな？」

瑠衣の一言に、不良たちの勢いが、一気に止む。

・・・これ、本当に瑠衣？

さつきまでの、あの軽そうな瑠衣は何処へ？

なーんか、別人・・・みたいな・・・。

まず、威圧感がハンパじやない。

殺氣が、あたり一面に広がつてゐるような・・・。

正直、私も怖いくらいだし・・・。

・・・て、魔術師？ 魔法使いなもの？

あ、それならさつきの結界も、なんとなく判る・・・気がする。

「・・・つ魔術師つてだけで、調子に乗るんじやねエよつー！」

短剣を投げてきた、先頭の不良が、バイクごと突っ込んできた。続いて、後ろの雪崩れ込んでくる。

瑠衣、結界でも張るかな・・・？

「あーーつたくも。めんどつちーな。

でも、ま。全員相手してあげるつて、最初に言つちやつたからな。

「

瑠衣。

それ、笑いながら言つてゐる、無いでしょ。

セリフ

「うへへん。せつかくだから、捕まえて、国にだそつかなあ……。

「

え・・と。

なにそれ、この人達に与える刑を、考へ中……？
の、のんきすぎ……。

「なにぶつぶつこってんだよ……」

向ひの一句で、瑠衣がぱつと顔を上げた。

「うん。じゃあ閉じ込めの刑に処す……」

嫌嫌嫌。

笑顔でその言葉は、怖いよ。

そんなに明るい顔で言われても、怖いもんは怖いよ。

「はあ？ なに言つてんだ？」
「

バイクの群れが、一瞬だけ止まった。

瑠衣は、それを見て、ニッと笑つた。

そして、さつきと同じように手を突き出す。
手から、オレンジを帯びた、白い光が飛び出す。

呪文とかは、無いみたい。

その光は、あつという間に皆をひつくるめると、
丸い、泡のような形に姿を変え、透明な（オレンジ色）しゃぼん玉
になつた。

バイクも、人も、皆。

その泡の中で、キヨトンとしていた。

何が起きたのか、うまく飲み込めないようだった。
そして、殺されてしまうのかと、怯えていた。

・・・私だつて、わからなさいさ。

とかく。

瑠衣が、強そうのは確かだ。

あれ？ 中の人達、倒れてぐ

「……ん。大丈夫。殺したりはしないよ。さつきのは冗談。

俺、殺人犯になっちゃうもん。」

二コリと笑う瑠衣。

氣絶させま

その様子を見ていたリーダーの方の不良は、あいた口を、閉じることが出来ず、突つ立つてた。

「・・・で、

次はボスですか?」

返事を聞かずに、瑠衣は不良の後ろに回りこむ。

・・・瑠衣は、不良の髪の毛をつかんだ。

「……」

・・・髪の毛 イゴール ハツラ。

どーりで、いい年して髪がしつかりしてるとと思つた。カツラを取られた、不良の頭には何も無し。

「うギヤあああああああアあああああアあつフー・ー・

•

イヤー。速い速い。逃げ足だけは。
というか、なんか可哀想になつてきただよ。不良が。

「うーん。あいつがカツラだつてのは、ホントだつたんだ。」

おい。

そんなに普通の顔をしなさん。

「んじゃ、行きますか。

もうすぐだし、

瑠衣が、歩き始めたので、私も、それについていくしかなかつた。

・
・
・
あ。

あの不良の皆。

どうなつたんだろう・・・。

第一章 記憶を失くした少女 六（後書き）

あ、あの人達は寝てますよ。
泡が割れたら、落ちた勢いで起きると思いますけど。

「琥珀はね……。」

と、やつぱり琥珀の事を持ちかけてきた。
不良たちを後にして、何歩歩いただろう……。
かなりの時間を、歩きですぐしたような。

ちなみに、『隣の町』までも行つていらないのだが……。
今のところ、最終目的地は瑠衣の故郷。
もうすぐ着くらしい、町のすぐ側だと。
数年帰つていならしいけど。

琥珀も、あの町にはよく行つていたらしい。

毎回、歩きですか……？
遠すぎるでしょ。それだと……。

ま、それはともかく。

何にも覚えていない私には、いく所も無かつたので。
ついていくことにした。

あんな、暴走族がいる、凍え死にそうなところはもうココ、ココだ。
それに、瑠衣のお母さんは、記憶とかについても詳しいらしい。
・・・解剖とか、されないよね……？

て、私。

なんで知り合つたばかりの少年を、ここまで信用できるんだろ。
普通、警戒とかするんじやないかな。
変な感じだなあ。

「琥珀は女の子のくせに、男以上に気が強くて、
城にいるのはつまんないって、俺とよく脱走したりしてたんだ。」

「城！？」

「うん。」

平然と答える瑠衣。
当たり前なのか？
しかも、琥珀つて子。
城にいるのがつまんないって・・・。
どれだけワガママなんだろ？う・・・。

「なんでそんなに退屈だったのかな？」

ちょっと疑問になつた。
お城だなんて、想像しただけで、居心地いいのに、
そこにいるのが、何で嫌だつたんだろう？

「んー・・・。」

瑠衣はちょっと上を向くと、

「琥珀の一族は、代々長く続いてきたものだし・・・。
それに・・・。」

で、またちょっと間を開けた。

「儀式とか、なんだとか、嫌いだつたんじゃないかな？」

・・・。

ふーん。

「・・・なんとなく、瑠衣の気持が、わかるなあ。」

「ん？」

別に、自分がそうゆうこと、体感したつてことは無いんだけ。なんとなく、自分もそんな感じがした。

しばらく経つてから、また瑠衣が話出した。

「やっぱ、あんたになら話してもよさそうだ。」

「・・・？」

なんのことさ？

しかも、あんた呼ばわりかい。

「・・・瑠衣の母さんは、神様だつてこと。」

・・・瑠衣の言葉を、真面目に聞いたとした私がバカだつた。こいが真面目腐つた話をするわけが無い。

「神様なんて、この世の人々が創り出した、想像の象徴でしょ？ 第一、神様がいたとしても、子供を生むわけ無いんだし。」

驚いた目で、瑠衣はこちらを見た。

「・・・やっぱ、琥珀と同じこといつた。」

「・・・またか。」

もつ、どうでもよくなつてきた。

瑠衣は続けた。

「・・・それはともかく、その指輪はね、

その神に、召された人が、本人から受け取るの。

琥珀の場合、『愛された』が正しいかも知れないけどな。」

「ふーん。」

その後も、瑠衣の説明は続いた。

何も話さないよりマシだったから、聞いていた。

指輪リングは全部で七つあって、

それぞれに、『属性』つていうものがあるらしい。

種類は、『光』『風』『日』『水』『月』『火』『闇』。

お、覚えられん・・・。

で、琥珀の指輪リングは、光。

そのほかの指輪は、各国に預けられて、その国の召された人が守つていたらしいけど・・・。

「ある人が闇の扉シンバスを開いたせいで、封印されていた怪物が復活。召された人はもちろん、沢山の人が殺され、国が滅んだ。」

瑠衣の瞳は、影がかかつたようにも見えたが、それでも真剣だった。

「指輪のほとんどが、その怪物に奪われたけど、光属性の琥珀の指輪は、闇に飲み込まれない。・・・つまり、奴らの手に入らなかつた。」

うなずくことも出来ずに、ただただ聞いていた。

「・・・光属性の指輪は、他の指輪よりも遙かに力が強いんだ。
もちろん、その反動も。」

指輪は持ち主が死ないと、その元を離れない。

だから、残つた指輪の持ち主、・・・琥珀は皆を守りつとした。
・・・琥珀の国が襲われた時、琥珀は指輪の力をすべて使つた。
奴らは引いた。今もその国は無事に活動している。
けれど琥珀は・・・」

土を踏む足が止まる。

語尾が震えていた。

私自身、凍りつくような感覚に襲われるぐらいだった。

・・・なんとなく、予測していたのかもしれない・・・。

聞こえないくらい、小さな声で瑠衣は言つた。

「・・・・・死んだんだ・・・。」

第一章 記憶を失くした少女 八

死んでしまった人、『琥珀』に似ている私。

・・・私、いつたい誰なんだろう。

普段のこと、身の回りのことは覚えているのに、自分の名前や、自分の家族、友達の名前・・・。どれも、自分に関係するものだけ、切り抜かれたように覚えていかつた。

多分、瑠衣は勘違いしているだけで、私の知り合いじゃなかつたかもしれない。

・・・。

謎だ・・・自分のことだけど・・・。

「んー。」

ふと、瑠衣が口を開いた。

「つたく、足が痛くなつてきた。

「これだから歩きでいくの、嫌いなんだよなあ。」

・・・。

歩きで行くのが、嫌い。
てことは・・・。

「他に移動方法があるわけ！？」

ちよつとキレた。

こんな辛い思いして、足の豆がつぶれて硬くなっちゃうほど、散々歩かせておいて……。

「 いっ！？

あ、ああ、あるつちや有るんだけど……。」

あやふやな返事。

私、こうゆうの、大ッシッ嫌い！

「 あるなら先に行つてよ！

つたく、気が利かないんだからっ！

はき捨てるよしここつても、やつぱつまだイラッとしてる。

こんな自分が嫌になる。

困り果てた瑠衣がいつた。

「 つても、琥珀、お前何も覚えてないんだろ？

魔術使つにも、琥珀の魔道がないと出来ないし……。」

・・・。

は・・・？

魔術は聞いたけど、魔道・・・つて、なにさ。

瑠衣はつづけた。

「 ・・・あーつも、

つまり、瞬時に移動するには、琥珀自身の能力が扱えないとい、で
きないの！

今の琥珀は、何も覚えてないんだろ！？
だから、全く使いもんにならないんだよつ。」

— . . .

「なにキレイなんのさ。

卷之三

早口になつてゐる＝イラついている。
瑠衣の行動パターンはこれで決定。

•
•
•
○

ところで、能力を扱ううてことうて・・・。

גַּם־בְּעֵבֶר־עַמּוֹד־בְּעֵבֶר־עַמּוֹד

まず、全身の力を抜く。

ここで抜きすぎると、波動がハンハなしに迷いましたから、少し加洞を加える。

それを一箇所に集中させて、形にする。
そつすれば・・・まる。

「氷の刃の出来上がり」

私の手中には、小さな、それでも十分鋭い刃を持つた、
氷で出来た剣があった。

いつてみれば、短剣の形をしてい
る。透き通つてて、少し冷氣を発してゐる剣。
それが、一本、私の手のひらで浮いてい

そつくり。琥珀の剣と瓜一つだ。

「せうじやなくて、これでいいんでしょ？
瑠衣のいつ、能力・・・魔道の使い方。」

ハツとして、瑠衣は言葉をだした。

「ああ。うん。それでいいんだ。」

「じゃあ、早く行こうよ。
歩くのはもういい。」

「？

歩くよ。」

「・・・は？」

なんですか？

樂つてこいつで、また歩くの？

・・・。

もづ、嫌になつてきた・・・。

「お前を、空中を歩くのさ」

と、瑠衣は地面をトンツとけり、
そのまま宙へと舞い上がった。
んで、振り向いて私に言った。

「簡単だぜ、結構。」

刃を作れるくらになら、こんなのは底でもねえし。」

・・・屁つて・・・。

・・・馬鹿。

とむらじ」とで、同じよひに地を蹴つた。
体が軽かつた。羽根みたい。

浮いて瑠衣の隣に並ぶと、頭を殴つた。

「いっ～～～つてつー！」

「女の子の前で、屁とか言つんじやないつー！」

「つづう。

「ゴメンナサあイ・・・。」

「誤るなりやんとしなさーつー！」

「わわわつー御免なせーつー！お許し下せーつー！」

・・・ん？

「この感じ、前にもどじこかで・・・。

・・・。

「氣のせいか・・・な？

「んじや、あとは簡単。

瑚珀は俺の後をついてくればいい。

「この移動法なら、太陽の周りを一秒でだつていけるんだぜー！」

「え、嘘、それホント？」

太陽を・・・一秒で・・・つて、

普通、ありえないでしょ・・・。

「嘘じやねえよ。

だつて、琥珀がやつてのけたんだぜ、最初に。」

得意の笑顔で瑠衣は言った。

琥珀が、最初に・・・ね。

すごい人だつたんだ、琥珀つて人は

その分・・・。

どれだけ周りの期待を背負つていたんだろ・・・。
我慢とか・・・沢山してたんじやないのかなあ・・・。

「ねえ、瑠衣。」

「ん? 何?」

一呼吸あけて、私は言った。

「・・・琥珀は、幸せだつたのかな。」

「おっし、着いたぜ

俺の故郷、『ヌイルスアイル』！！」

「え、もう？！？」

空を「歩き」はじめて数分。

小さな山と丘を越え、さらに平原を進んだ所で、瑠衣は降りた。目の前に広がっていたのは、オレンジ色と緑色がマッチした、小さな村。

レンガとつたが、いい具合に合つていて、なんだかかわいらしくも見えた・・・。

瑠衣が積み重なつたレンガでできた、少し大きめの門のそばに近寄る。

そこには1人の・・・

1人・・・？

小さな・・・緑色のトカゲみたいのが、よろこびに身を包んで立つていた。

「やつほ、レイガル。久しぶりだな！
ずいぶん昇進しちゃつて・・・立派だなあ。」

「ああ、瑠衣様！御久しゅう御座います！！
はい、おかげさまで此処までこれました・・・。」

・・・！

トカゲの声は、見た目以上にかわいらしく
瑠衣を見つめる目も、愛らしい感じがした。

レイガルと呼ばれたトカゲは、私に気がつくと
大きな目を、よりいっそう大きく見開いた。
誰がどう見たつて、驚いているようにしか見えない瞳だつた。

「る、瑠衣様・・・

」こちらの方は・・・。」

「おう、琥珀だ。

・・・・・っと、ちょっと急いでいるんだ、通してくれるか？」

「ちよつとつ？！」

私の言葉は無視か。
琥珀じゃないのに・・・。
まず誰かもわからないつてのに・・・。

「それが瑠衣様・・・今、御通しする訳にはいかないのです。

その・・・トウイル一家に犯行予告が届いておりまして・・・。

「トウイル? 誰だ、そいつ?」

「一ヶ月前に入居し始めた、いたつて普通の4人家族で、じぞこます。普通じゃないといえば、12歳になる娘さんが魔道を使えるのどうと・・・。」

「ほう、それで?」

「だめだ。まつたく話がわからない。
まあ、聞いてみたところ、そのトウイル一家に届いた予告は

「本日、一人の娘が尋ねてくる。その娘は魔道を使い、そなたら家族を殺すであろう。」

「避けたければ、前夜、カラサの丘に50フュル用意しろ、

と、まあ、普通に普通すぎる脅し強盗。
フェルつていうのはお金の単位みたい。
・・・で、なに?』カラサの丘』つて。

「・・・で、結局用意できなかつたから、誰も村に入れないと。
そういうことだな、レイガル。」

「・・・はい。」

「・・・まあ、お前が俺らを疑つていいわけではなく、単に上に命令されたからっていつのは よくわかつた。」

意味ありがちなレイガルの顔を見て、つぶやくように瑠衣はいった。
それから私に向かつてこいつった。

「今日は無理みたいだ。
明日なら平氣だよな、レイガル。」

トカゲは短く、はつきりと「はい」。
なんだか、初任務を任せられた幼い後輩、みたいな感じだった。

わざの会話に出た、「カラサの丘」。

あれが何か気になったから、とうとうつれてきてもらつた。

一旦、普通に見れば、よくある緑の広がつた丘。

特に何の特徴もない。

特に、どころじゃない。何もない。
所々、小さな花が咲いているだけ。

赤色だから、小さくてもよく目立つていた。

「ここはさ、緑しかないところだけど、木も空氣も澄んでいて
あの町にとつても、一種の休憩場みたいな、落ち着けるところだ
つたんだ。」

しゃがんで赤い花を見ながら、瑠衣の話に耳を傾けた。
にしても・・・見るたびに綺麗だな、この花・・・。
単純な赤じやなくて、・・・んー・・なんていえばいいのかな。
真紅に似た色。宝石であるルビーのような輝き。とれたてのリンゴ
の艶めき。

いろんな「赤」が、見事に一致している感じだつた。

瑠衣は続けた。

「だけど、ある日誰かが放火したみたいで、この丘も燃えてしまつ
たんだ。

木は倒れて、空氣は濁り、丘自体が酷く変化してしまつた。

そんな時、「カラサ」っていう旅人が現れてな、
その・・一度琥珀が見ている、その花、「シアル」っていうんだ
けど、

その花を植え始めたんだ。

カラサの行動は、町の人たちに大きな影響を与えて、町の人たちも木や草花を植え始めた。で、無事に丘は復活して、旅人は去った。きつかけを与えてくれた、その人に感謝して、丘にその人の名前を付けたと。

あー・・・、琥珀、聞いてる・・・？」

「うん。聞いてる。」

私の態度を見て、「聞いてる」といわれても、誰も信じないだろうな。

だつて・・・ね。

太陽に当たるうと、力いっぱい広げた6つの赤い花びらも、真ん中にひょっこり顔を出している、黄色いめしべも、かわいくてしようがなかつた。

摘んでみたい心境を抑えて、立ち上ると

「んじや、今日の宿、探さなきやな

と、いつた瑠衣の背中を、追い越す勢いで飛び立つた。

・・・

なんとなく、風がおかしい感じがした。
花・・・シアル・・・?

何か言いたげに、風が私の頬を撫でた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119f/>

The Last Ring

2010年10月28日08時46分発行